

Oscar Wilde, “The Fisherman and his Soul”の漂泊する魂と、古代エジプトの靈魂観

吉田 朱美

オスカー・ワイルドの童話集 *A House of Pomegranates* (『ザクロの家』, 1891年)に収録された一篇“*The Fisherman and his Soul*”「漁師とその魂」はある日自分の引き揚げた網にかかってくる女性の人魚に恋をした若い男性の漁師を主人公とする物語である。漁師はこの人魚との結婚を望むようになるが、人魚の仲間入りを果たすためには人間の持つ魂を捨て去ることが必要だと彼女から聞かされ、しかしその捨て方がわからないため途方に暮れ、最終的には魔女の力を借りて、自分の魂を身体から追い出す。人間の身体から追い出されてしまった魂は寄り添わずさまよう。

魂を追い出した後に残る『心』を備えた人間本体と、それとそっくりの姿かたちをした「魂」との分離、そして対話、という奇怪なイメージをどう解釈するかに関しては批評家たちがすでにさまざまに頭を悩ませてきており、精神分析の「超自我」や「自我」といった概念に当てはめようといった試みなどがなされてきている(星野 8)。しかし本発表では、この小品における「住处となる肉体を求めさまよう魂」および「人間本体と対話する魂」のイメージを描き出す際、古代エジプトの靈魂観がワイルドにとっての重要な着想源となっていた可能性を探ってみることにした。

「漁師とその魂」という物語は、純粹に作者の自由な想像力の産物であるというよりはむしろ、ヨーロッパ文学の伝統、既存の文学作品からのパステーションやパロディをふんだんにもりこみ、意識的に間テクスト性を示すような形に織り上げられたテキストであるといえる。美しい声で歌う人魚と漁師との間の恋、その成就をはばむ種族間の壁、というモチーフは、ギリシャのセイレンに始まる「水の女」(小黒)の系譜を踏まえたものだが、デンマークの童話作家ハンス・クリスチャン・アンデルセンの「人魚姫」との類似はとりわけ明らかであり、批評家たちによっても既に指摘されてきているところである。

アンデルセンの「人魚姫」の主人公である人魚も人魚の王の末娘だったが、ワイルドの「漁師とその魂」に登場する人魚も、最初に漁師の網にかかった際に「おねがい放して、私は王の一人娘で、王は年老いて一人きりなんですから」(248)とその素性を明かしている通り王族の出、人魚の姫であり、また物語内で彼女が最初に言及される時には“a little Mermaid” (248)、その後も繰り返し“the little Mermaid”と呼ばれる。ワイルドは、アンデルセンの物語のそれとほぼ同じ枠組みの中で、ほぼ同じ材料を用いながらも、アンデルセンの物語において当然の前提とされていた価値体系を大胆に逆転させるような形での書き換えを行い、特に、キリスト教の教えと結びついた「魂」の概念や価値を問い直し、相対化しているように見受けられる。

アンデルセンの「人魚姫」では、魂をもつという人間の世界にあこがれ、嵐の海から自分が命懸けで救い出した人間の王子に恋をしたいたいけな人魚の姫が、人間の足を手に入れるために誰よりも美しく歌える声を手放し、300年も生きられるという人魚族の寿命も手放すといった様々な犠牲を払い、人間世界の仲間入りをして王子のもとに近づき、その愛を勝ち得ることで永遠に生きる魂を手に入れようと骨を折る。ここで強調されるのは、人間のみが持っている人魚その他の生き物は持つことができないとされる「魂」の価値である。アンデルセンの童話世界の中では、キリスト教的な天国、そしてそこに至るための必須条件としての魂というものの価値が至高のものとして絶対視されている。これはアンデルセンの物語におけるオリジナルというわけではなく、アンデルセンがさらに自作の元ネタとして参考にした、ドイツロマン派作家、フーケの『ウンディーネ』から取り入れたものであることが小黒氏の著書『水の女——トポスへの旅路』でも指摘されている。

「漁師とその魂」は、フーケの『ウンディーネ』やアンデルセンの「人魚姫」と同様の前提、すなわち、「魂を有する人間」対「魂を持たない人魚あるいは水の精」の異種間恋愛の困難という条件は維持しつつも、この同一の構図を大胆に逆転させ、それにより従来の価値の転覆を成し遂げる。今回は人魚の姫に恋を仕掛けるのは人間の漁師の側であり、彼に結婚を求められた人魚は、「魂を捨ててきてくれないと応じられない (250)」と返事をする。漁師はその要求に対しためらいもなく快諾し、そして、魂をどうすれば手放せるか神父に相談したところ、魂は何よりも貴いものであり、それを捨てようなどとは滅相もないとたしなめられる (250)。しかしなんとしても自分の魂を手放したい漁師がそれを引き取ってもらえないかと商人のところへ向かうと、「お前の魂は全く役に立たず、肉体ほどの価値もない」とすげなく拒まれてしまうのだ。「人魚姫」において、手に入れようとしてもなかなか人魚の手に届かない至高な存在であったものが、「漁師とその魂」においては、捨てようとしてもなかなか捨てられない困った付属物となっている。漁師は「神父は何よりも大事だというのが、商人は全く価値がないというこの魂とはいったいどういうものなのか」と思案する。「人魚姫」ではあえて問われることなく絶対視されていた魂の「価値」が、ここでは相対化され、問い直されているのである。

ワイルドにこのような問い直しを可能にさせたものの一つとして、古代エジプトの靈魂観に彼が親しんでいたということを指摘したい。「漁師とその魂」にみられる「住処となる肉体を求めさまよう魂」や、『心』を備えた人間本体」と、それとそっくりの姿かたちをした「魂」との対話、という奇怪なイメージには、来世での蘇りのため、魂の住処としての肉体が失われることを恐れてミイラづくりにいそしんだ古代エジプト人たちの死生観と驚くほどの一致が見られるように思う。

古代エジプトにおいても、人間の主要構成要素としての「人間本体」、「心」および「魂」が別々のものとしてとらえられており、「古代のエジプト人たちは、人間存在の構成要素の複数性としての[中略]『彼の心』、『彼のカーである魂』、『彼の影』、『彼の名前』について語っていた」(Assmann 384)。Assmann の論文 “A Dialogue Between Self and Soul” は「人間自身」と「魂」との対話を描いた古代エジプトの文学ジャンルに焦点を当てたもので、ワイルドもおそらくこの種のテキストに接していたことであろう。笈川博一氏によれば、住みかとしての肉体が失われれば「死後の生」の可能性も絶たれてしまうため、魂としてはそれはどうあっても避けたいことであった(笈川 97-8)。ワイルドの物語で漁師の身体から追い出された魂の醸し出す寄る辺なさすぎ感はいくつもの事情によるものではあるまいか。魂が漁師に拒絶されるたびに泣きながら「沼地を独り渡って行く」情景が繰り返し描写されるのも、古代エジプトで「沼地を渡って旅する」というのは性交を意味する婉曲表現であった(フォーサイス 48) ことを踏まえたワイルドの遊戯であったのではないかと推察される。

A. Wiedemann によると魂「カー」は人間の「ドッペルゲンガー」または「ダブル」として認識される(Wiedemann 23)。ワイルドの物語の中で「人間本体そっくりの姿かたちで立ち現れ」(256)の魂の姿は、このような古代エジプトの靈魂観や、ヴィクトリア朝後期の写真術から着想を得てつくりあげられたものであろう。さらにフランスの唯美主義者テオフィル・ゴーティエの「ミイラの足」(1840年)や英国の同時代作家グラント・アレンによる「ミイラに囲まれた大晦日」(“My New Year’s Eve among the Mummies,” 1884年)など、先行する「エジプトもの」の短編からワイルドがインスピレーションを得ていた可能性も高い。

「漁師とその魂」が発表される直前の1880年代頃は、ヒエログリフの解読が進み、古代エジプトについての記事が様々な雑誌の紙面を埋め(Gange 164)、「異文化世界の宗教体系との接触が既存の世界秩序にくさびを打ち込んだ時代」(同 208)であった。そして「漁師とその魂」はまさに、「異世界・異文化との接触による既存の価値・秩序の相対化」をテーマにした作品といえよう。まず人魚界との出会いによって、「魂」の価値を問い直すことを漁師は強いられる。また、漁師と離れてから一年目、東方を旅してきた魂は、旅先で様々な宗教体系に触れ、「神の姿を見せろ」(260)と問うたびに、黒檀でできた偶像や、翡翠の蓮華座にのった、仏像を思わせる大理石の像、更にはかの地で人々に神として崇められている「知恵の鏡」を示される。

ここで、McCormack が『「アジア的」というしかない』(103)と形容した、魂による漁師への誘惑のやり方について振り返ってみたい。「富の指輪」をおとりにして漁師を魅惑しようとする魂はこのように述べる:「この指輪を手にした者は世のすべての王よりも富める者となる。だから来て、それを取りなさい。そうすれば世界中の富はあなたのものです」(251)。これはたとえば、ルカ4章などでイエスを誘惑する悪魔の台詞「あの国々の全支配権と栄華とをあげよう。あれは神からわたしに任されていて、誰にでも好きな人にやってよいのだから。それで、もしあなたがわたしをおがむなら、あれは皆あなたのものになります」(『新約聖書』ルカ5:5-7、塚本虎二訳 岩波文庫版184頁)を書き換えたもののように思われる。そう考えると従来のキリスト教的価値を体現する存在であるはずの「魂」が聖書における「悪魔」に、その誘惑を退ける漁師がイエス・キリストにそれぞれ対応することとなる。

参考文献

- Assmann, Jan. “A Dialogue Between Self and Soul: Papyrus Berlin 3024.” in Albert I Baumgartner, Ed. *Self, Soul and Body in Religious Experience*. Brill, 1998. 384-403.
- Gange, David. *Dialogues with the Dead: Egyptology in British Culture and Religion 1822-1922*. Oxford UP, 2013.
- McCormack, Jerusha. “Wilde’s fictions.” Peter Raby ed. *The Cambridge Companion to Oscar Wilde*. Cambridge UP, 2010. 96-117.
- Wiedemann, Alfred. *The Ancient Egyptian Doctrine of the Immortality of the Soul*. H. Grevel, 1895. Web.
- Wilde, Oscar. “The Fisherman and his Soul.” *Complete Works of Oscar Wilde*. New York, HarperCollins, 2008. 248-272.
- 笈川博一 『古代エジプト 失われた世界の解説』 講談社、2014年
- 小黒康正 『水の女——トポスへの船路』 九州大学出版会、2012年。
- フォーサイス、マーク著、篠儀直子訳 『酔っぱらいの歴史』 青土社、2018年。
- 星野英樹 「オスカー・ワイルドの『漁師とその魂』: 網にかかったアニマとしての人魚」『国際経営・文化研究』第17巻 第2号 (2013) Web.